

学術調査報告書

2008年 5月 8日

(フリガナ)	アサイ マユミ	入学年度	2006年度
申請者名	浅井 万友美	学年	2年

研究題目	ダライラマ 13 世代における宗教政策と仏教の役割
主任指導教員	藤井 毅

(1) 学術調査の目的

ロシア連邦ブリヤート共和国首都ウラン・ウデ市のハンガロフ歴史博物館Музей истории Бурятии имени М.Н.Хангалова (以下、ロシア語の名称がわかるものはそれを、確認できていないものは英語の名称をできる限り記した) に所蔵されているチベット語文書を閲覧し、その内容や性格などを確認すると同時に、時間の許すかぎり書写を進めることを第一の目的とした。さらにブリヤートにおける史料の所蔵・公開状況について情報を集めることもめざした。

ブリヤートはバイカル湖のおもに東側に位置し、現在ロシア連邦を構成する共和国のひとつである。19世紀にチベット仏教信仰が拡大し、その修習のため人々の中には遠くチベットまで赴く者がいた。当時チベットはヨーロッパ人の入国を禁じており、ロシア人であるブリヤートの人々に入国を認めない方針だった。そうした障壁に阻まれながらも、彼らはモンゴル人であると偽るなどの方法で仏教の中心地、チベットの都ラサをめざした。その中でもっとも傑出した人物がアグワンドルジエフ Агван Доржиев (1854-1938) である。彼は 20 代半ばにラサ近郊の仏教寺院に入山し、20 年近くをチベットで過ごした。帰郷後はブリヤート等において言語や宗教、社会の改革に取り組むと同時に、1923 年のブリヤート・モンゴル・ソビエト社会主義自治共和国成立に際しての自治権獲得にも大きく貢献した。

このように彼は郷土第一の偉人であると同時に、チベット史においてもよく知られている。歴史に名を残す活躍は、仏教の最高学位を獲得しチベットの政教両権の長であるダライラマ 13 世の仏教学上の相談役に抜擢された時から始まった。以降、そのそば近くに仕

える中で 13 世の大きな信頼を獲得していく。そしてチベットとロシアの友好関係を確立せんと構想の下、両国間を数度にわたって行き来した。それが中央アジアにおいて約 1 世紀の間続いた英露による「グレートゲーム」最終章に、ひとつの山場を作り出すことになる。彼の行動に、チベットに対するロシアの野望をかぎとったイギリスが、チベットに軍事使節団を派遣したのである。その際イギリス軍の侵入を前にラサを出た 13 世をモンゴルへ導いたのもドルジエフだった。また 1913 年に結ばれ、両国が互いの独立を承認し合ったという点でチベット史において重要な意味を持つチベット・モンゴル条約調印において、彼はチベット側代表を務めた。1922 年以降はロシアにおけるチベット全権代表となり、彼によってサンクトペテルブルクに建立された仏教寺院がチベット公使館としての役割を果たした。このように外国人でありながら彼がチベット史において果たした役割は、同時代のチベット人以上に大きい。

今回調査の対象とした史料は、13 世を初めとするチベット政府の枢要メンバーや、おそらく当時チベットに留学していたブリヤート人仏教僧らからドルジエフに宛てて送られた書簡群である。これらはロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所 Institute of Mongolian, Tibetan and Buddhist Studies of Siberian Branch of Russian Academy of Sciences (以下、モンゴル学・仏教学・チベット学研究所とする) 研究員、ニコライ・ツィレンピロフ氏 Nikolay Tsyrempilov により近年「発見」されたものである。以下、これらの書簡群を便宜的に「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」と呼ぶ。53 件からなる同文書は、49 件がチベット語で書かれたもので残りがモンゴル語による。報告者の言語能力による制約から、4 件のモンゴル語書簡は調査対象からはずした。

この文書は報告者の今後の研究と関わる可能性の大きい、非常に重要なものである。報告者はダライラマ 13 世代における宗教政策と仏教の役割を研究課題としており、特に 13 世がどのような宗教政策を理念として構想していたか、宗教の長として内外でどのような問題を抱え、その中で仏教をどう位置付けていこうとしていたか、あるいはそうした彼の姿勢がチベットをどう規定したかといった問題に取り組みたいと考えている。同文書には、13 世の思想や姿勢を知るのに有益な内容が多く含まれているものと推測できる。

同文書が持つ価値の大きさは、チベット語で書かれた近代史の一次史料へのアクセスが非常に困難である状況と関係している。1959 年にダライラマ 14 世がインドへ亡命した後チベットを勢力下に置いた中国共産党政府は、チベットの帰属をめぐる世界的関心とその後もくすぶり続けるチ

ベット独立運動への懸念から、チベット政府が残した文書の多くについてその公開を著しく制限している。報告者は一昨年チベット自治区档案馆を訪ね、そうした現状を確認した。またチベット亡命政府のあるインド、ダルムシャーラーのチベット文献文書館でも調査した結果、1959年以前の史料の所蔵が極度に限定的であることがわかった。こうした事情のため現在チベット近代史研究に使われる史料は、当時のチベットを藩部として統治していた清朝政府による漢文などのもの、あるいは1904年以降チベットに駐在員を置いた英印政庁によるものなどに限られている。「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」はそうしたチベット語史料の欠落を埋める、大きな価値を持つものであると考えられる。

同文書の調査により、チベット近代史研究におけるチベット語史料の活用は、確実に前進するものと思われる。さらには同文書が報告者個人の研究にとどまらない、より広い研究領域に何らかの貢献をする可能性も生まれるだろう。敦煌出土のチベット語文献が大英図書館やフランス国立図書館によるプロジェクトで整理公開され、歴史学のみならず古チベット語研究など他の複数の分野においてもその進展に貢献しているように、チベット近代の史料が広くチベット学全体に寄与するための一助になることを期待している。

(2) 調査実施地および期間

ハンガロフ歴史博物館において2008年3月10日より20日まで、休館日の土・日曜日を除く平日に行った。また週末などを利用してモンゴル学・仏教学・チベット学研究所を2度訪問し、書庫見学とツィレンピロフ氏インタビューを行った。ウラン・ウデ市郊外アツェガト村にあるドルジエフゆかりの仏教寺院と併設の資料館も見学した。

(3) 学術調査の具体的な実施内容

ハンガロフ歴史博物館での調査は、まず閲覧料についての話し合いから始まった。料金は史資料の内容・稀少性などにより1点につき150～3000ルーブルと決められている。これは閲覧のみの値段で、撮影したりコピーをとる場合、追加料金が必要である。提示された値段を了承し、史料名や調査期間などが記された書類にサインした。これで閲覧許可が出たことになる。閲覧を許可された時間は平日の午前10時より午後5時までで、準備や片づけを含めてその時間内で終わるようにと強く求められた。所蔵品修復部門の部屋のデスクをお借りしての閲覧となった。

調査は「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」の全体像を把握するため、各文書の差出人、日付、押印の有無、整理番号などを確認することから始めた。次に重要度に応じて優先順位を決め、順に筆写した。時間の制限があるためこの段階では内容の理解を目的とせず、書き写すことに専念した。多くのものが行書や草書にあたる書体で書かれており、また使われた筆記具の条件も関係して、文字の読み取りにかなり手間どった。判読できない部分も少なからずあった。

平日の日中を博物館での調査に充てたため、モンゴル学・仏教学・チベット学研究所での書庫見学はツイレンピロフ氏の協力で日曜日に実施した。書庫は地下に造られており、地上を車道と路面電車が走っているため振動や騒音を感じたが、書庫じたいは原爆による攻撃にも耐えるように造られているとのこと。空調管理も大規模な機器によって厳密に行われている。書庫内は大きく2部屋に分かれており、モンゴル語・ロシア語とチベット語の史資料が別々に保管されていた。

その後、同氏の親族の運転で郊外のアツアガトへ向かった。1時間足らずで寺院に到着したが、あいにく鍵を持っている僧侶と資料館のスタッフが不在で、さまざまに連絡を試みてようやく彼らに戻ってきてもらうことができた。彼らの説明によれば、その寺院と資料館はドルジエフと直接の関係を持つものではなく、彼の生地が近いという理由で関連の史資料が集められ展示されているとのことである。彼に関する多数の写真やろう人形、彼がチベットから持ち帰ったという歴史的遺物（15世紀の高僧のはいた靴など）のほか、文字資料も展示されていたが、ほとんどがロシア語であるため報告者には理解できなかった。またドルジエフとの関連が明らかでない展示物があり、そのことを資料館スタッフは理解していないようだった。

ツイレンピロフ氏へのインタビューは後日、彼の研究室で1時間半ほど実施した。ブリヤート共和国内でどのような機関がどういった史料を保存しているか、中でもモンゴル学・仏教学・チベット学研究所の所蔵物がどのような性格のものであるか、整理・公開がどれだけ進んでいるのかについて回答してもらった。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」中の49件のチベット語書簡（整理番号18575～18623）は、現在読解を進めているところでありまだ十分に内容を確認できていない。

よって本報告では書簡内容の詳細には立ち入らず、まず史料批判を試み、続いて差出人や差出時期についての分析を行う。

初めにこの文書の来歴について簡単に述べる。ドルジエフの個人文書である同文書がなぜハンガロフ歴史博物館に所蔵されてきたのか、残念ながら確かなことは確認できなかった。ドルジエフは日本のスパイである等の罪状で1937年に逮捕され、その2ヵ月半後ブリヤートの病院で心不全により没した。その後、彼の所持品の一部を統合国家政治局Ob'edinennoe Gosudarsvennoe Politicheskoe Upravlenie (OGPU) が持ち去ったという。その際没収されたものの一部、あるいは没収を免れたものの一部が当該文書のもとになっているのではないかと推測できる。ハンガロフ歴史博物館は特に仏教関係のコレクションで有名で、ほかに未整理のモンゴル語・チベット語文献を少なからず保存している。しかし博物館内にそれらを整理・分析できるスタッフがなく、ツィレンピロフ氏が依頼を受けてその任に当たる中で「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」を「発見」したということである。ただし書簡群にはその時点ですでに2種類の整理番号がふられていたことから、その存在がこれまでまったく知られていなかったわけではないことがわかる。過去に整理が試みられたが完成しなかったか、あるいは整理の記録がきちんと残されないまま、再び未整理の史料の山に埋もれてしまったのではないかと考えられる。

ドルジエフに関係する文書はウラン・ウデだけでなくサンクトペテルブルクやモスクワなど、複数の地域・機関に保存されている。その理由として、彼が1898年にチベットから帰郷した後、サンクトペテルブルクおよび故郷ブリヤートやカルムイクなどチベット仏教徒の住むいくつかの地域で活動したことが関係していると推測できる。「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」以外にも彼とダライラマが交した手紙があったことは先行研究から明らかであり、同文書に欠けている部分がそうしたところで補える可能性が十分に残されている。それらと同文書との違いについてツィレンピロフ氏は、前者が公的なものであり後者は私的なものとの見方を示した。確かに同文書はほとんどがドルジエフ個人に宛てられたものであり、そこに記された彼の肩書きもチベットでの地位を示すもののみである。病についてのアドバイスを求めるといったごく私的な内容のものも含んでいる。しかしロシアにおけるチベット代表としてのドルジエフに宛てたのではないかと思われる書簡の存在が認められることから、同文書を私的なものと断じることには疑問が残る。公私というとらえ方の適否については他機関の所蔵史料と比較した上で判断すべきであり、今後の課

題としたい。

文書の真偽の判断に当たっては、文章の形式、印章、使われた筆記具といった外的特徴はもちろん、書かれた内容の史実との整合性などを材料とした総合的な考察が欠かせないが、残念ながら現在報告者は正確な判断をするだけの知識を欠いている。ツイレンピロフ氏は真偽の問題について、たとえばダライラマの親書に複数の異なる印が使われていることを理由に、文書自体の信憑性を疑う声があったことを明かしてくれた。それに対し彼は、ダライラマが公私の印を複数使っていたことを指摘し反論したという。まだ詳細な検討ができていないが、概観するだけでもダライラマからの文書は書体の美しさやつぶりの正確さなどにおいて、他の送信者のものからきわだった特長を持っている。これは特別な訓練を受けた者にしかできないことであろう。また印章も鮮明に押されており、第三者が簡単に偽造したり書き換えたりできるものではない。ツイレンピロフ氏はこの文書の出版を計画しており、文書解題も掲載の予定だという。そこで詳しい史料批判も行われると思うので、今はその出版を待つことにしたい。

次にこの文書の持つ性質として記憶しておきたいのが、これらがドルジエフによって「残された」ものであるという点である。「選ばれた」と言い換えてもいいだろう。特にソビエト時代になってから、ドルジエフは常に自分の置かれた立場や環境に無神経ではいらなかっただろうと推測される。1937年の逮捕について先に述べたが、実はそれに先立って1918年にも突然逮捕されるという経験があった。また宗教者に対するソビエトの政策が年々厳しくなっていくことを、チベット仏教徒の代表的立場からほかのだれよりもはっきり認識し警戒の念を抱いていたものと考えられる。そうした中であってはチベットからの手紙の管理に十分配慮しただろうし、どれを手もとに残すかについて何らかの選択をしたのではないだろうか。たとえばダライラマは社会主義政権下のブリヤートやモンゴルでどのような宗教政策が行われ、寺院や僧侶がどのような待遇を受けているか、その事実を知りたがっていた。それに答えてドルジエフは密書と口頭の伝言により、それらの地での惨状を伝えたという。しかし「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」を概観するかぎり、ダライラマのそうした疑念やソビエトに対する不信感を読みとることはむずかしい。用件として取り上げられているのは、主にパンチェンラマ亡命やラサの情勢、チベットで非常に重用されるロシア産錦織の交易のことなどである。また「選択」を行ったのがドルジエフの手を離れた後にこれらの書簡を管理または所有した者である可能性も排除できない。

以下、49件の書簡について差出人と差出の時期という観点から若干の考察を行う。まず差出人については以下のとおり。

表 1

	差出人	地位等	通数	備考
1	ダライラマ 13 世	政教のトップ	22	代筆スタイルのものを含む
2	ツァロン	大臣	5	2通はドルジェフ以外の高僧宛て
3	シューカン	スィールン	3	
4	カンギユル・ラマ		2	
5	内閣		1	
6	クンブム寺(?)学堂長(?)と執 事長(?)		1	クンブム寺は中国青海省にある大 寺院
7	イエシェーロドゥー・シャクツァン		1	シャクツァンは僧官を中心とする、 ひとつの家族のような組織
8	クルン・チューxxx		1	xxxは読みとれなかった部分
9	ペマ		1	
10	チャムトー		1	
11	チュートゥプテンギユメー		1	
12	チンパチュンペー		1	
13	不明		9	
		合計	49	

特定できた 12 の人名のうち 1 番から 3 番までは政府の要人である。2 番のツァロンは 13 世の寵臣でその右腕として近代化政策を推進しながら、大臣や軍総司令官を務めた。彼からの書簡にはロシア産品についての記述が多く、政務の一方で手広く交易を行っていた彼がインドだけでなくロシア方面ともつながっていたことを示している。3 番のシューカンも大臣を務めた後、この 3 通が出された時期にはさらに上の位であるスィールン職にあった。13 世の成人前、ドルジェフがそのツェンシャブ（仏教哲学の相談役）という高い地位を得た背景にはシューカンらの力添えがあったとする説があり、ドルジェフと特別なつながりを持った人物であったと推測できる。イギリスや中国と結ぼうとする立場の者が多い

チベット政界にあって、親ロシア派ともいわれた。4 番のカンギュル・ラマはブリヤート出身の転生活仏で、当時の第 6 世は後にドルジェフと行動を共にするなど、後者と非常に近い人物だった。6 番以降の人物や組織についての詳細は不明である。8 番から 12 番までの個人名は、チベットの寺院に所属するおそらくドルジェフと同郷の仏教僧たちで、チベットの状況を彼に知らせる役目を持っていた者、あるいはドルジェフの近親であろうか。書簡文面に判断材料を期待したい。

チベットを離れてからかなり長い時間が過ぎていたにもかかわらず、ドルジェフが上記のようなチベット政府中枢の人物や内閣と接触を持っていた背景として、彼がチベットを代表する立場にあったことが関係していると考えられる。チベット・モンゴル条約調印に際して彼がチベット代表を務めたことについては、その立場が公式なものだったのかどうかについて若干の議論がある。しかし 1922 年以降、ペトログラード（1914 年にサンクトペテルブルクから改称。1924 年からはレニングラード）にチベット公使館が設けられると、その代表としての彼の役目は少なくともロシアサイドでは公式なものと同められていた。

次に差出の時期ごとに見た状況は以下のとおりである。

表 2

	年	通数	備考
1	1911	1	
2	1913	1	
3	1914	3	
4	1921	2	同年と推定される 1 通を含む
5	1924	22	同年と推定される 3 通を含む
6	1925	2	同年と推定される 1 通を含む
7	1926	1	
8	1927	4	同年と推定される 2 通を含む
9	不明	13	
	合計	49	

差出年にいちじるしい偏りが見られるが、その理由として以下のような点が考えられる。まずもっとも多くが集中している 1924 年については、この前年にパンチェンラマ亡命と

いう大事件が起きたことと深く関係している。パンチェンラマはダライラマに次ぐ高僧とされ、それより小規模ながら所領を持ち、ダライラマをトップとするチベット政府から半ば独立した状態を保っていた。19世紀末から20世紀初めにかけてチベットは数度にわたってイギリスや中国の軍と戦い、それに伴って自軍の増強・近代化を迫られた。そのため前例のない高額な軍費調達が必要となった。ダライラマ政府より応分の負担を求められたパンチェンラマは、それをきっかけに内モンゴルへ亡命した。当時、中華民国政府からの新中国への参加要請を拒絶していたダライラマとしては、パンチェンラマが中国と結んでその後援を頼みに勢力を拡大することを恐れ、パンチェンラマの一刻も早い帰国を急務としていた。ダライラマや内閣、シューカンからドルジエフに宛てた1924年の親書の多くに、パンチェンラマ早期帰国実現に対する協力要請が記されている。

1924年付けの通数が突出しているもうひとつの理由として、ダライラマからドルジエフに宛ててまったく同じ日付、体裁で書かれたものが6通ある点が挙げられる。それぞれの用向きは異なっており、複数の用件を1通にまとめた他の書簡と違ってなぜそのような書き方がなされたのか、その背景は不明である。当時のソビエト領内とチベットとの通信事情により文書が一度にまとめて届くこともあり、それらの1通ごとに分けて返信したのかもしれない。

さらにもうひとつ1924年に関わる事情として、ロシア使節団のラサ訪問も気に留めておきたい。これは世界革命「輸出」のため、ソビエトがインドへのルート上にあるチベット、そして東方の仏教徒の間に大きな勢力を持つダライラマに注目し関係を結ぼうと実施したものである。同年8月にボリソフを団長としてラサ入りした彼らが、13世とドルジエフの通信を促した可能性が考えられる。

書簡の発行年を見るに際して、ドルジエフ自身の境遇とも照合していく必要がある。1921年以降の文書が比較的継続して残されているが、それ以前ドルジエフには公然とチベットと通信するのが困難な時期があった。1912年の最後のチベット訪問のころには、イギリスによりロシアのスパイとして指名手配とされていた。1918年の逮捕の際は、金銭や貴重品を国外に持ち出そうとしたとしてカルムイク近くで拘束され所持品を没収された上、モスクワの刑務所へ送られた。こうした困難な時期にはチベットとの文書のやりとりや保管がむずかしかつたものと考えられる。

その後ロシアにおけるチベット全権代表となりソビエトの政策と協調した時期の書簡

が、当該文書全体の半分近くを占めている。その間ドルジエフはチベットとの関係構築をめざすソビエト政権の指示を受けて、モンゴルやブリヤートなどチベット仏教徒の住む社会主義政権下の諸地域において仏教が尊重されているとする情報をチベットに伝え続けた。しかし先に触れた通り、チベット人商人に託した密書と口頭の伝言を通じて、ついにはそれまで伝えていたものとは異なる事実をダライラマに明かすにいたる。そこにはモンゴルの状況として、政府が宗教を認めず僧侶たちは無力であることがつづられていた。それは1927年のことだった。「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」の書簡は、確認できている範囲ではその訴えと同じ1927年のものが最後である。

このように文書の内容ばかりでなく、来歴や真偽に関してもまだ調査の足りない「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」だが、もちろんそれは文書自体の価値を左右するものではない。チベット近代史研究においてチベット語史料が十分でない現状において、所定の手続きをふまえばアクセスできる一次史料としてたいへん貴重である点でも変わりはない。北京オリンピックを控えた現在、チベット問題そのものとともに中国の情報開示の後進性が国際的な関心を集めているのは周知のとおりだが、史料に関する閉鎖的現状も大きな問題として残されている。そうした現状にあってこの「ハンガロフ歴史博物館ドルジエフ文書」の持つ意味は、やはり大きい。

最後にブリヤート共和国における史料の保管と公開の状況について紹介したい。ハンガロフ歴史博物館以外に次のような所蔵機関がある。

- 1.ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル・仏教・チベット学研究所
- 2.キャフタ博物館 Kyakhta Museum
- 3.ブリヤート共和国国立文書館 National Archive of the Republic of Buryatia
- 4.ブリヤート共和国国立図書館 National Library of the Republic of Buryatia
- 5.ロシア連邦保安庁文書館 Archive of the Federal Security Service of the Russian Federation
- 6.諸仏教寺院

1.のモンゴル語コレクションは約6千点、ブリヤートの年代記など手書き文書が多く、また義和団事件の際、北京に住むブリヤート人仏教僧が戦火から守ったというカンギル

(大蔵経のうち経と律) などを含み貴重なものである。チベット語コレクションは約 5 万点、複数の異なる版の大蔵経のほか、さまざまな高僧の著作集、仏画や仏具など文字以外のものを含む。ハンガロフ歴史博物館旧蔵の手書き文書が同研究所に移管されており、ここに含まれる。所蔵品の一部はカタログ化されている (Tsyrempilov, Nikolay compiled, Vanchikova, Tsymzhit edited, *Annotated catalogue of the collection of Mongolian manuscripts and xylographs MI of the Institute of Mongolian, Tibetan and Buddhist Studies of Siberian Branch of Russian Academy of Sciences* (Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, 2004). Id., *Annotated catalogue of the collection of Mongolian manuscripts and xylographs M II of the Institute of Mongolian, Tibetan and Buddhist studies of Siberian Branch of Russian Academy of Sciences*. (Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, 2006).ほか)。現在、所蔵品のデータベース化が進められており、近い将来の公開を予定している。所定の手続きによりどの収蔵品も閲覧できる。

2.のキャプタ博物館でも多数の史料を保存している。詳細は確認できなかった。

3.のコレクションはブリヤート共和国政府内にあり、主にロシア語のもので構成されている。ソビエト期の史料が多く、仏教関係のものは少ない。

4.には 17 世紀の書籍のほか行政文書もあるが、稀少なものは少ない。

6.の仏教寺院は各地にあり独自に史資料を保存しているところがある。しかしほとんどが積極的な公開をしていないのでアクセスは困難である。

今回の調査は本学の二木博史先生の古いご友人であり、ハンガロフ歴史博物館に勤務しているアーラ・シェラポヴナ・ゴンボエヴァ氏 А л л а Г о м б о е в а のご尽力のおかげで、すべて順調に進めることができた。ロシア語の理解力に欠ける報告者のために、彼女は報告者の調査期間を通じてさまざまに協力してくれた。ここに感謝の意を表しておきたい。

参考文献

Thubten J. Norbu and Dan, Martin, "Dorjiev : Memoirs of a Tibetan diplomat". *Hokke Bunka Kenkyu*, 17, 1991. (ドルジエフ自伝の英訳)

Andreyev, Alexandre, *Soviet Russia and Tibet : the debacle of secret diplomacy*,

1918-1930s. Brill, 2003.

Snelling, John, *Buddhism in Russia : the story of Agvan Dorzhiev, Lhasa's emissary to the tsar*. Vega, 2002.

<<http://www.russianmuseums.info/M1202>>, 2008/04/10.

(5) 調査地・文書館建物などの写真

1. ハンガロフ歴史博物館



2. モンゴル学・仏教学・チベット学研究所



3. ドルジェフ資料館

